

草庵仏教

第112号
(発行日)
1999年10月1日
(発行所)
真宗大谷派 念佛寺
〒6638126 西宮市
小松北町1-2-3
電話・FAX(0798)
41-5346
(発行人)
土井紀明

《 聞法会ご案内 》

- * 同朋の会 (念佛寺)
22日午後2時
.....
- * 聖典講座(浜屋仏壇店)
第1土曜日午後3時
- * 念仏座談会(念佛寺)
第3土曜日午後3時

老年期の過ごし方

定年後あるいは子育てがすんで、老年に入っていく時代になって、どういう生活をしたいのか、望ましいのか、という時期には、いろいろか、この生活の仕方が考えられま

定年後、年金暮らしになり、家の中で特に何を目的もなく、ぶらぶらと気ままな生活をする人もいますが、こういう生活はいまでもなく、かんにばしくないですね。仕事一筋に働いてきて、仕事以外に特に興味や関心のあるものをもたなかった人が、定年になって突然仕事から解放されて、気楽にはなつたけども、何をすることもなく空虚な日々を送る生活。こういう生活は張りやがなくなり、病気にもかかりやすくなるようです。

時期に、なお生計のために日時を費やすのは惜しいと思えます。仕事以外に興味がなく、定年後も一般の仕事がしたいといわれる方もいますので、こんなことをいうと、いらんお世話だ、といわれるかもしれませんが。

第三に、自分がやりたくてできなかったことをこの時期に実現しようとする生活があります。趣味や奉仕活動や生涯学習などにたっぷり時間を有効活用しようとする事です。この生き方が今日では最もすすめられ、願わしいとされています。園芸や習い事やあるいは地域の活動やボランティア活動などで、趣味を生かしたり世の中のお役に立とうとする事です。なかには、自分のやりたいことをしながら、同時にいくらかの収入にもなるという場合もあります。

以上、現代の日本人の定年後・子育て後の生活の仕方の中で、自分の日頃したかったことをするとか社会に少しもお役に立つような生き方、こういう第三番目の過ごし方が今日の日本では一般に願わしいとされています。

ただ、もう少し違った仏教的な観点から老年期の生き方を考えてみたいのです。それは、老年期こそ何にもまして「永遠なる真実」に心を寄せて生きる時期にするこ

とです。これはインドでは古来から老年期の願わしい過ごし方とされています。

私の知っているヒンズー教徒のインド人ですが、彼は私に「ブッダがヤマトに積尊がお悟りを開かれた場所、観光客の聖跡参拝の人たちや観光客に数珠を売って生計を営んでいました。彼は、積尊の遺跡のある大塔の前に店を構え、子供たちと協力し、商売に励みました。それによって、周りの貧しいインド人の中にはかなり高額な所得を得ていました。そして土地も少しづつ買っていきましました。ところが、年齢が五十才にも達し、子供たちもほぼ自立して商売が出来るようになった頃、彼は一切商売から手を引いて、畑仕事をぼつぼつしながら、宗教的な生活を主とするようになりました。首に大きな数珠をかけ、毎日欠かさず神に祈り、聖典を読み、僧侶を招いては供養をするというような生活に転じました。あれほど商売一筋だった人が、一挙に生活形態を変えたのは、私自身驚きました。しかし、これはインドでは特異なケースではななく、古来から伝統されてきた生き方だったので、彼は神との交わりを深め、死後の生まれゆく世界を視野に入れて、自己を浄化していこうという生活を選んだのです。

ところが日本では、老年になつてもなお経済的なゆとりを欲して世間の仕事に時間が多くを費やしている人たちが

多いのです。これは日本人の人生観とインド人の人生観の違いから来ているので、たしかに年を尊く思いません。たしかに年金だけで生活するのは苦しいでしょうが、簡素な生活をこころがけ、世間的なお付き合いはできるだけの必要なく、生計に資する仕事をしなくて、生活できない場合でも労働時間は少なくして、精神的な充実と心の安らぎを求め、これを主として、かつ余力あれば世の中の平和や福祉のためには、たらくような、願いわば利他の生活が最も願わしいと思えます。

先ほどの趣味や道楽や適度な社会奉仕に老後を生きていくのは結構ですが、人間の魂は非常に底が深く、こうしたものによつては、充足し安定することはとてもできないと思えます。

「滅びつつある私という不安」「愛されたいが愛されないという孤独」「やがてこの世から消えていかねばならない空しさ」「なおらぬ病にかかるとはならないかという不安」「死後どうなるのかという怖れ」「親しい人を亡くしたり、おのれの能力の減退などからくる喪失感」など、趣味や奉仕活動だけではとてもこたえられない人間の根本問題が老年の人の根っこに横たわっており

ます。現代社会の中で、多くの趣味や享楽があるにもかかわらず、どこかうつつとうしい、さびしいものを抱えているのが私たちです。去年は自殺者

が三万人をこえました。これだけ繁栄した日本では、殺人者および自殺予備軍は、随分多くは老人性鬱病など、随分多くは老人在が精神的に閉塞された状態にいます。そうした中で、老後の介護はさされても魂の充足は、福祉行政などの手及ばないものです。

人間の心は、私たちが考えているよりもずっと底が深く、趣味や道楽や小さな奉仕などでとても埋められないほどの深淵に根ざしています。

よく人は「めいめい自分が欲しいものなどをして満足すればいい」などといいますが、心の底には人間に共通な深い欲求があると思えます。普通の欲求が満たされず、いろいろなものに心が紛れて、気がつかないだけです。その欲求を清沢満之先生は「人間の至奥より出づる至盛

の欲求」と言われ、それこそまことの宗教心であると言われました。

心とそれは仏を求め神を求め消えてしまいうい。はかなく永遠のいのち、移ろいゆくもの、わたりていく人間愛、晴なからしめ、変わらぬ愛情、底運命にあたる慰め、離れ交わ

え、常に離れなれ、汚れた犯れ、何れも、浄ら

清く、浄まらぬ、真実（佛）を求め、宗

信心がいただけない理由を敢えて考える

*まず初めに、真宗の信心は如来のあたえたもうゆえ、我が力、我がはからいで信心を得ることはできない。

*念仏をろくろく申さぬゆえ——念仏は阿弥陀仏と私の接点であり、接触の場である。念仏がなければ、阿弥陀仏との具体的な接点がないゆえ、阿弥陀仏が観念化するおそれがある。

*本願をよく聞かないから——阿弥陀仏の本願のいわれを正確にまた何度も繰り返して聞かないから。弥陀の本願は念佛往生の願である。この願を何度も聞くこと肝要。

*仏説や親鸞聖人のお言葉を軽んずるゆえ——仏説、それを明らかにされた親鸞聖人のお言葉を九死に一生を救うがごとき重大なお言葉と頂戴し、お言葉に間違いなしと信頼すること。

*自分の愚かさが分からないゆえ——自分は賢いと思い、自分の考えが少しでも間に合うように思う。その驕慢心ゆえ仏の言葉がストレートに耳に入らない。自分は永遠の救いに対して全く無知無能と知り、知性の限界を知ることである。

*仏の真実にあいたいの念が薄いゆえ——我が人生は仏の真実にあうためであり、このこと一つを解決しなければ、生きるに生きられず死ぬに死ねないという、そういう願いを持続することである。願いが薄いからこの世のことにいろいろ心がまぎれてしまうのである。

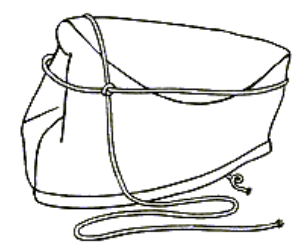
(上のようであればならないというつもりはありません。弥陀のお計らいはまことに不可思議なるゆえに、何を縁として信心を与えて下さるか、私には決める力はありません。ここにあげたことも、お念佛をよく申しつつ本願のいわれを常に聞いていく中で自然に、佛の加護により、後生大事の願いも相続し、自力の限界も知らされて信心成就されていくと信じております。)

教心。これが私どもの心の根っこにうごめいている。ではないでしょうか。ふたをするのには安易に欲求に忠実に生きようと思

じように。人とは違ったらなくても無難だ。周りに変な目で見られる。と、自分を守ろうと合

来ないのです。自分の生かすか、何を

風折烏帽子 (C)SHOGAKUKAN INC.



真宗聖典講座

慈悲に聖道・浄土のかわりめあり。聖道の慈悲といふは、ものをあわれみ、かなしみ、はぐくむなり。しかれども、おもうがごとくたすけとぐること、きわめてありがたし。浄土の慈悲といふは、念仏して、いそぎ仏になりて、大慈大悲心をもつて、おもうがごとく衆生を利益するをいふべきなり。今生に、いかに、いとおし不便とおもうとも、存知のごとくたすけがたければ、この慈悲始終なし。しかれば、念仏もうすのみぞ、すえとおりの大慈悲心にてそうらうべきと云々 (歎異鈔第四章)

現代語訳——(慈悲ということについて、聖道門ですすめられているような慈悲と、浄土門で語る慈悲とはちがいがありません。慈悲ということは、苦しむ悩む人をあわれにおもい、いとおし、守り育てることですが、聖道の慈悲というのは、自分の力で、人々を苦しみから救いあげて、安らかなしあわせを与えようとすることをいいます。しかし凡夫がどんなにつとめても、思い通りに人々を助けとげることには至難のことです。)

浄土門で慈悲を語る場合は、自分がまず本願を信じ念仏して、すみやかに仏のさとりを得させていただいて、その上で大慈大悲をおこして、思いのままに一切の衆生を救い、真実の利益を与えることをいふべきです。

この世に凡夫として生きてあるかぎり、どんなに気の毒だと思っても、思い通りに助けることはできないから、わが力によつて、この世で人々を救おうと願う慈悲は中途半端なものでしかありません。そういうわけですから、本願を信じ念仏を申すことだけが、ほんとうに徹底した大慈悲心だといえましよう、と仰せられました)

(歎異鈔第四章 第一講)

人間の一番大事な問題は、自利利他の問題と助かるといいます。自利というものは、自己自身が助かること、利他というものは他者を救うことをいいます。わが身が助かるだけで他者が助かることがない

れば、わが身が助かったといつてもその喜びには本當の満足感がありません。ちようど、親がいくらか幸せであつても、子供が苦しんでいたら、親は自分だけの幸せを喜んでいていかにいいかなものか。私も助かり人も助かつていくことがあつて初めて私の救いも満足されるのです。

純粋な慈悲の心を起こし、自分の力によつて他者を救うていこうと、あるいは自分の修行として他者を救うていこうというのが聖道門の慈悲です。慈悲の精神によつて、「人をあわれみ、かなしみ、はぐくむ」といふことと、この道は尊い道であるに違いありません。

ただ、聖道門の慈悲は自分の力で他者を救うていこうとするので、自分の能力に依存していません。ですから、自分の能力で自由に人を「たすけとぐる」ことは極めて難しいとありますが、実際そうだと思います。

「たすけとぐる」といふのは、本當の意味で助けるということと、たとえば、生活が貧しい人を見て、財物の施しをして一時的に困窮を救うというのとは、尊い救援活動であつても、ここでいう「たすけとげる」までにはならないと思ひます。助けとげるとは、真実まこと(涅槃の安樂)に人をいたらしめることと、すなわち「たすけとげる」ことは極めて容易ならざることです。

であつてみれば聖道門の慈悲では、人々への多少の援助はできても一人ひとり涅槃の幸せに導き至らせることは至難のことです。小さな援助は価値がないと言つてはいるのではありません。それはこの世において、大事なことであり、できうるかぎり人としてなしていくべきでしょう。ただここで聖道の慈悲がきわめて「ありがたし」といわれているのは、人にまことの幸せとしての涅槃に導き入れることの難しさをいわれているのでしよう。

親鸞聖人の最晩年に、先月号に紹介しました忍性律師が常陸の清涼寺で十年間も活動しています。忍性律師はまさに聖道の慈悲を強調された方です。で、常陸にいる親鸞聖人のお弟子たちの中で忍性の考えに共鳴した人もいたと思ひます。それで聖人のお弟子の中から「浄土の教えでは、飢えたり病氣をしていける人を助けることをしないのか」といふような疑問が出されたことがあつたかもしれせん。この問題は何時の時代でも大事な問題です。こうした問題

に對して、聖人はこの第四章の内容のお話をされてたのかもしれない。

さて、浄土の慈悲とは、阿彌陀仏の大慈大悲によつて、我も救われ人も救われていく道です。南無阿彌陀仏の名号には自利利他の徳がこもつています。南無阿彌陀仏をいただくことによつて、私は阿彌陀仏に撰取されて、浄土に生まれる身となさしめられます。これが自利であり、この自利が阿彌陀仏から恵まれることを往相回向と申します。すなわちわが身の救いが成就されるのです。

そして、私が浄土に生まれて仏となり、仏のお徳をいただくことは、仏の大慈大悲の徳を完成し、迷いの世界にかえつて悩み苦しむ人々を自由に救うはたらきをさせていただくのであります。これを還相回向といふ、衆生を「おもうがごとく」すなわち思い通りに救う還相利他の功徳を實現せしめてくださる阿彌陀仏の恵みを還相回向といひます。この還相回向の功徳も南無阿彌陀仏にこもつてはいるのです。

このように南無阿彌陀仏の名号は「私を救い、人を救う仏にしてくださる」といふような往相・還相の功徳がこもつてはいるのです。このような南無阿彌陀仏を私どもに回向してくださるのです。

聖人の御和讃に
南無阿彌陀仏の回向の
恩徳広大不思議にて

往相回向の利益には
還相回向に回入せり

(我らにお与え下さる南無阿彌陀仏には、広大にして不思議な阿彌陀仏のお徳があり、この南無阿彌陀仏をいただく人を浄土に生まれしめる利益の中には、浄土からこの世に還つて来て迷える衆生を救うはたらきをさせてくださるお徳がある)

「往相回向の大慈より
還相回向の大悲をう

如来の回向なかりせば
浄土の菩提はいかがせん」

(浄土に生まれさせてやろうという阿彌陀仏の大慈によつて我らは救われ、救われたものが迷える衆生を救う大慈悲をも与えてくださる。もしこのように徳をいただかなかつたら、自利利他を円満に實現しようといふ浄土の菩提心をどうして我らの身につけることができようか)とあります。このあたりのことを歌われたものと

思います。南無阿彌陀仏のなかには、私を救い、私を佛にならしめ、人びとを限りなく救うていく徳がこもっている。だから南無阿彌陀仏をいたたく道が、真実に我も救われ人も救われていく道なのだ、仰せられるのです。ですから「念仏もうすのみぞ、すえとおりの大慈悲心にてそうろうべき」と申され、南無阿彌陀仏をいたたくことが衆生を真実に助けていく大慈悲心になるのであると。

なお還相廻向について御和讃には

「願土にいたればすみやかに

無上涅槃を証してぞ

すなわち大悲をおこすなり

これを回向となづけたり」

(浄土に生まれたならばすみやかにこの上ない涅槃のさとりを完成して広大な利他の大慈悲心をおこすのである。このことを阿彌陀仏の本願のお恵みすなわち回向となづけるのである)と申されています。還相回向の大慈悲を実現させていただくのは、私が浄土に生まれてこの上ない涅槃の悟りを完成して初めて、大慈悲のはたらきをさせていただくのであるといわれています。

ではこの世に生きている間は利他の行いは全くないのであろうかという問いが起ります。

還相大悲の広大な功徳をいたたくのは浄土に生まれて涅槃の悟りを成就した後であることはいままでもありません。しかし、往相・還相の功徳のこともつたお念仏をいたたく浄土に向かつて生きる人の上にも、ただ往相のお徳だけが現れて還相のお徳は何ら現れないかという、私は還相のお徳は現世においても、還相の徳が(影を落とす)ようなかたちで、この世の私どもの人生に反映されてくるのではないのでしょうか。親鸞聖人が「往相回向の利益には還相回向に回入せり」とか「往相回向の大慈より還相回向の大悲をう(得)といわれる語感からは、すでに往相として浄土に生まれゆく道を歩むところには、還相廻向の徳が影を落とすというニュアンスを感じます。

本願を信じ念仏申すものがわが身の中から仏の功徳の光を放つことは出来ないけれども、阿彌陀仏の光明を浴びる者は阿彌陀仏の光を映すものとなる、そういふことはゆるされるのではなからうか。少しおあげさなたとえになりませんが、お月様はそれ自体真つ黒な土のかたまりで一点の光も放つことは出来

ないけれども、太陽の光を受けて、太陽の光を反射している。念仏の行者は、己自身からはなんら光を放つことは出来ないけれども阿彌陀仏の救いの光を反射するものとされる。この世においては、罪悪深重の凡夫ゆえ、自らが大悲の光明を放つ徳はありませんが、阿彌陀仏の光明を反射するものとされる。それはどこまでも凡夫の側に理由があるのではなく、まったく阿彌陀仏の恵みによって反射する者たらしめられる。

そして、浄土に生まれて仏となれば、光明を放つ当体となる、すなわち涅槃を証した暁には利他の大悲の徳を実現し光明を放つものとなりましょう。

この世において、浄土に生まれて往く往相の道を歩むものは、同時に阿彌陀仏の光明を反映するものとして利他の大悲を行ずる徳があらわれるのではないのでしょうか。親鸞聖人が「現生の十種の益」の中に「常行大悲の益」(常に大悲を行ずる益)(教信證信の巻)と書いて、現生すなわちこの世において本願を信じて念仏申す者は、常に大悲を行じているという素晴らしい利益をかならず恵まれるといわれるのは、このことではないでしょうか。お念仏の生活は「常に大悲を行ずる利益」を我知らず、自ずから行じているのであると言われます。なんと有り難い功徳でしょう。

ではなぜそれほど利益があるのでしょうか。それを推察しますと、まず南無阿彌陀仏の本願の法は万人がこれによって救われる普遍の真実だからであります。それをこの世において「弥陀の本願のご恩によつて、善なく徳なく能力なき私のごとき者にはからずもこの上なきまことの幸せにあわせていただきました。有難うございました。釈尊・七高僧・親鸞・蓮如各尊者の申される如く真実間違いない本願でありました」と讃嘆すること、これが弥陀の光明を映していることになるのです。私どもの人間性が高められるから映す者となるのではありません。弥陀の本願をこの世において、この歴史の上に、悩み多き人々の中で、憂い多き世の中で、弥陀の本願の救済の真実性をあかしすること、このこと以上に人々への恵みはないのです。これに比べたらこの世の福祉も社会変革もなお小なる事であります。

それは念仏往生の本願は万人を救う永遠の真実なるがゆえであります。

その真実はどこにその具体的なはたらきを顕わされるかという、極めて小さな悩める魂の私たち一人ひとりの上をおいてより外にありません。この小

さき者への反射をうけて、周りの人々もまた弥陀の本願に帰せしめられていくのであります。

ただここで、重々申さねばならないことは、私どもは宿業の深いものゆえ反射といえども、仏の光の反映をはなれだ乏しいものにして、邪魔しているなど慚愧せしめられる。私は阿彌陀の光で輝いているなどとは自分からは言えない。しかし、私は仏の光を邪魔しても、私に現れたもうお念仏のお徳は、私においてはおたつき、その功徳を私の人生生活の上身に現さずにはおかない。それは、南無阿彌陀仏御自身の徳の広大不可思議なるがゆえであります。意識的に為される善よりも、知らず知らず私に届いて下さるお念仏そのものの徳が、周りの人々を大悲し、救いへと導きたもうということ、これすべて如来二種の廻向の働きにおさまるのであります。

なおここで「いそぎ佛になりて」ということですが、この世において本願を信じ念仏を申す者は阿彌陀仏の撰取によつて、正定聚の位に住せしめられ、この世の命が終るを縁として浄土に生まれて仏の悟りを完成して仏となると教えられています。

それまでの仏教は一般に生まれ変わり死に変わり仏道修行を重ねた暁に仏となるのに対比すれば、この世かぎり念仏の信者は仏にならしていただけるという道であります。ですから浄土往生の法門のこゝとを曇鸞大師は「早作佛の法」(早く仏になる法)といわれています。

結論的に申しますと、お念仏にたまわる還相のお徳によつて、死して浄土に生まれて仏となり、限りない大悲を起こして迷える世にかえりて衆生救済のわざを思う存分なし、この世にありてはお念仏の光明を映す器となさしめられることによつて、他の人々に「まことの幸せここにあり」とあかしする、いわば大悲を行ずるものとなる、どちらも南無阿彌陀仏のはたらきであります。されば、(念仏もうすのみぞ)念仏をいたたくことが(すえとおりの大慈悲心)といえましょう。

なお還相廻向については、諸説あります。現在の私の領解において述べさせていただきました。

(文・土井)

